

「底が突き抜けた」時代の歩き方 270

ますます深まるマルクスの孤立

《人間は一つの類的存在である。というのは、人間は実践的にも理論的にも、かれ自身の類を、(人間自身の類をもその他の事物の類をも) 人間の対象にするからというだけではなくて、むしろ - そしてこれはただ同じ事柄にたいするもう一つ別な表現にすぎないが - 人間は自分自身を現存する生きた類として扱うからでもあり、また自分自身を、ある普遍的な、それゆえに自由な存在として扱うからでもある。》

26歳のマルクスが書き始めた『経済学・哲学草稿』の中に収められている一節である。「一つの類的存在である」人間は各々が特定された個人である限りにおいて、単に一つの「特定の類的存在」を生活しているにすぎないということが、そこから導きだされる。このマルクスの言葉に即して、人間にとって普遍的とはどういうことであり、自由とはなにかを考えると、個人が「特定の類的存在」として、それを生きていくことこそがなにより普遍的であり、人間にとっての自由は、個人の中で「特定の類的存在」が、と同時に「特定の類的存在」の中で個人が、抑圧や束縛を感じることなく、思うがままに生きられることであると解される。つまり、個人にとって「特定の類的存在」を生きることの中に何よりも自由が溢れ返っており、「特定の類的存在」にとっても個人の有限性の中に無限の自由を感じとろうとする。

《なによりもまず避けるべきことは、「社会」を個人に対立する抽象物としてふたたび固定することである。個人は社会的存在である。だからたとえ、他人と共同生活を持たないとしても彼の生活は社会生活の発現であり、確認なのである。たとえ個人的生活の現存様式が、多分に特殊な様式であったり他方類的生活が多分に普遍的な様式であったりする - そしてこのことは必然的なのであるが - としても、あるいはさらに類的生活が多分に特殊で、または個人的生活が多分に普遍的であるとしても、人間の個人的生活と類的生活とは、別個のものではない。》

この一節もまた、同じ『経済学・哲学草稿』の中の言葉である。人間が特定の個人において「一つの類的存在」であるなら、もちろん「人間の個人的生活と類的生活とは、別個のものではない」し、人間がつくりだす社会の中で「一つの類的存在」としての特定の個人は、特定の社会的存在として生きていく。ただし、人間がつくりだす社会が「個人に対立する抽象物」ではなく、一つの類的生活を特定の個人として生きることができるような社会であったならば、だ。ここでマルクスはなにを云おうとしているのか。明確なのは、「人間の個人的生活と類的生活とは、別個のものではない」にもかかわらずこれまでの人間の社会の中では誰でも特定の個人として生きるときは具体的であり、類

的存在として生きるときはけっして特定されることのない抽象的な存在でしかなく、したがって人間の具体的な個人的生活は抽象的な類的生活と対立せざるをえなくなっているということだ。

マルクスの言葉を使わずに考えてみる。食べたり、話したり、映画を観たり、読書しているときの自分は、いうまでもなく具体的な私である。そこではいつも怒ったり、笑ったり、悲しんでいる自分がある。ところが、私は一人の個人として存在している私だけではなく、組織集団の中で存在し行動している私でもある。当然のことだが、組織の中で振る舞っているときの私は組織の一員としての私であって、一人の個人として振る舞っているときの私とは区別される。では、一人の個人としての私と組織の一員としての私とはどこで重なり、どこで重ならなくなるのか。

いうまでもなく組織の中でも話したり、笑ったり、怒っている私をしばしば見出す、そのとき私は一人の個人として話し、笑い、怒っているのだろうか。それとも組織の中の私としてそうしたり、そう感じているのだろうか。組織というのは単なる集まりではない。どのような組織もある目的や方向性をもって作りだされているから、組織の一員である以上は、組織の共同意思を組織の一員として負わなければ、組織はたちまち機能しなくなって解体に瀕する。つまり、組織の共同意思を念頭に置かずに、誰もが一人の個人として思いのままに振る舞うなら、組織は壊滅する。だから、組織を存続させようとするなら、一員は組織を存続させようとする意思を持ち、その意思の下に一人の個人として振る舞いたくなる気持や行動を抑制し、統御しなくてはならない。

マルクスが先の一節の中で提出している問題は、一つの「特定の類的存在」である個人は人間が作りだした社会の中で、特定の個人そのままの状態において、一つの特定の社会的存在であることはできないのか、ということだ。もっと砕いていえば、一人の個人として振る舞うことが、社会的存在のかたちをとっているあらゆる組織の中でどうして組織の共同意思に反する、自由気儘な行動として抑圧され、指弾され、拳句の果ては除名のような処分に行きつくことになるのか、ということだ。もちろん、そうしなければ組織は成り立たなくなるからである。ここに浮かび上がってくるのは、個人と組織のありかたをめぐる問題のようにみえるけれども、その程度の問題ではけっしてなく、社会生活の中で人間は、一人の個人として一つの「特定の類的存在」を生きることが不可能になっているという、まさに人間の生存にとって根本的な、最大の問題にほかならない。

あらゆる生命体は、個として類であるという基本的な性格を本能のうちに刻印されている。類的個として統一されており、調和している。生命の本能としてそうっており、もしその統一や調和を踏み外すなら、種や個体を維持できなくなってしまう。本来的には人間もまた、その宿命を免れることはできない。だから、生物としての本能を踏み外している人間は、類を維持するために社会をつくらざるをえなくなった。ところが、人間が社会をつくりだしたとき、類的個として統一され、調和する生きかたが逆にできなくなってしまった。社会の中で分別させられた個と類は対立し合うことによって、お互

いに侵食し合う関係へと踏み外すことになったのだ。人間は個として生きるとき、類を生きることをやめ、類として生きるとき、個であることをやめねばならなかった。個と類は出会えなくなって、個は個以外のものであることはできず、個が社会的存在であろうとすると、個は個であることをやめて、社会の一員という抽象的な存在であるほかなくなった。抽象的な存在とはいってもなく、かけがえのない個でなくなるのだ。

人間は特定の個人として生きるそのままの状態です社会的に存在できることを願っているけれども、いまの社会ではその願望は叶わない。であるなら、個人と社会とがどうしても対立せざるをえない状態においては、個人の自由をできるだけ拡大していく方向に民主主義を実現していこうとするのは必然である。しかし、個人と社会との対立状態を乗り越えないかぎり、個人の自由は社会の制約の中で利己的に拡大していくばかりで、社会的存在としての自分にけって出会うことはできないから、個人と社会の対立状態の乗り越えの方向にこそ、人間にとっての真の自由が広がっているのではないかと、というのがマルクスの考えである。なぜなら、個人の能力は社会的に存在する中で最大限発揮され、そして人間は自分の能力を活かすことに至上の喜びを感じる存在だからだ。

《共産主義はわれわれにとってつくり出されるべき一つの状態ではない。また、現実がそれに準ずべきであるような一つの理想でもない。われわれが共産主義と呼ぶのは、現下の状態を廃棄する現実的な運動のことである。この運動の諸条件は現に存在する前提から生ずるのである。》

マルクスが27歳の時に書き始めた『ドイツ・イデオロギー』の中の、あまりにも有名な一節だが、忘れ去られることにおいても有名な一節である。この一節もまた、マルクスが孤立しているように、孤立している。共産主義が「現下の状態を廃棄する現実的な運動のことである」なら、廃棄されるべき「現下の状態」とはこれまでの文脈でいうなら、生物としてのみ個と類が重なっているにすぎない人間のありかたが社会の中では、具体的な個と抽象的な類との対立状態を指していることになる。その対立状態を廃棄して、具体的な個の中に抽象的な類を、すなわち、個人のうちに各自の社会的存在を取り戻していく「現実的な運動」こそが、本来の共産主義であり、おそらく個と類との対立状態が完全に解消されないかぎりには - その解消に向かうプロセスは永続的であろうが - 共産主義的な運動のありかたも永続的である、とマルクスはいつているのだ。

我々がいま生存していることによってつくりだされている、連綿と打ち続いてきている、いまあるこれまでの人間の歴史は前史的な段階に相当しており、人間にとっての真の歴史は個と類の対立状態が解消されていくプロセスの中で始まっていくにちがいない。マルクスの言葉と向き合っていると、そんな気がしてならない。ということは、まだ我々は我々自身にとっての真の歴史を手にしていないということだ。いまでもなく、「現下の状態を廃棄する現実的な運動」はまさに現実的であることによって、「現下の状態」を固定することをたえず願っている国家と衝突せずにはいられない。類は国家に奪われているから、個と類の対立状態の解消はしたがって、国家の解消にほかならず、抽象的

全体の立場としての国家から個は類を取り戻さなくてはならないのだ。

人間の前史としての歴史はあまりにも混沌としており、信じられないほどのアイロニーに満ち満ちている。いつの時代にも露わに浮き彫りにされてくる個と類の対立状態の解消について、マルクスは孤立している具体的な個のなかに、切り離されている抽象的な類を取り戻す「現実的な運動」を提唱しているのに、あろうことが、その対立状態を抽象的な類の中に具体的な個を強制的に取り込もうとすることで解消しようとする全体主義が、共産主義の名を借りて20世紀のある時期、はびこった。つまり、具体的な個人の消滅であり、個人の利己的な行動を抽象的全体の立場としての国家に滅私的に奉公させる一方、支配階層は各人の利己的な行動を都合よく国家意思として剥き出しにし、開花させていこうとする。

《現実の個別的な人間が、抽象的な公民を自らのうちにとりもどし、個別的人間として、その経験的な生活において、その個人的な労働において、その個人的な関係において、類的存在となったときはじめて、すなわち、人間が自分の固有の力を社会的な力として認識し、そして、組織したときはじめて、したがって社会的な力をもはや政治的な力の形で自分から切りはなさないときにはじめて、人間的解放は完成されるのである。》

マルクスが25歳の時に書いた『ユダヤ人問題について』の一節であるが、誤解しようもなく具体的な個のほうに一貫して軸足が置かれている。人間の一生が具体的な個の歩みとして描かれる以上、それは当然のことだ。にもかかわらず、共産主義とはけっして相容れない筈の全体主義国家が共産主義の仮面を被って、全体主義のイデオロギーの下に個人を従属せしめようとするのだから、錯誤もはなはだしいといわざるをえない。つまり、全体主義国家は単に個人を国家に全面的に従属せしめようとするのみならず、全体主義のイデオロギーの手足となる政治的人間へとつくり変えようとする。各人の固有の力が「政治的な力」へと吸引されていくことによって、人間は全体主義国家の中でますます「抽象的な公民」と化し、その「抽象的な公民」の中身はえげつないほどの利己と保身で一杯になっているというのが、抽象的全体の立場というものの正体である。なぜそうなるのかはわかりきっている。人間は「抽象的な公民」の中では生きられないから、「抽象的な公民」の殻を被る度合いに応じて、具体的な個人として生きる利己性をより多く発揮せざるをえなくなるからだ。

もちろん、共産主義の冠をいくら被せようとも、全体主義国家のイデオロギーとマルクスの思想とは全く無縁である。マルクスはマルクス主義ともすでに訣別している。なぜなら、マルクスの思想ほど主義から遠い考えはないからだ。ベルリンの壁の崩壊以降、あたかもマルクスの思想、哲学が破綻したかのように語られたが、破綻したのはマルクス主義である。マルクスは全く無傷で、いまでも著作の中で語りつづけているけれども、彼の声に真剣に耳を貸さなくなる情勢が続く中で、彼の孤立がますます深まり、我々の孤立も激しくなる一方だ。

2002年1月5日記